

対話と議論の活性をめぐる

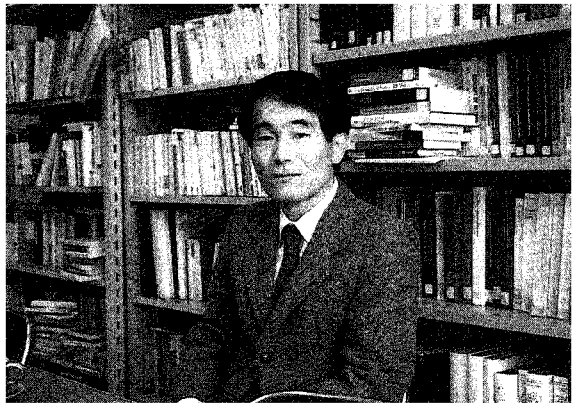
都留文科大学初等教育学科教授 平野英一

私が都留文科大学に勤めだしてから十二年たちました。私の専門が哲学というせいから、十二年もいながら、他の諸先生方に比べて、都留市民の方々と接触することが少なかったことを今さらながら思います。

さて、私は本学では、一、二年生を対象に哲学の概論的な講義として、人間の生活においてかくも古くから哲学が存続してきたのは何故か、そこに人間の生活の営みと哲学的反省との本質的なつながりがどのように根づいているのかを考えてもらっています。また二、三、四年生対象の演習では、自由、正義、平和等に関する社会哲学の根本的な諸問題を取り上げて学生諸君とともに研究しています。本年は「善き生活」とは何か、という古くからの哲学の問題を現代に生きる者の視点から見直してみようとしています。この十二年を通して強く感じることは、哲学を教えるということの難しさです。この難しさの中には、教える私自身が哲学することの難しさをまずまず自覚するようになってきたということも勿論含まれていますが、もう一つには学生諸君に対話や議論を通じて哲学的反省を自ら行うように誘っていくことが年毎に難

しく感じられるようになったということです。

私は教師をめざす本学の学生諸君に哲学を教えることを通して、これまで自分たちが持ってきた知識、学校で知識として学習してきた知識のあり方を吟味し直し、それを通して人間がそもそも「知る」ということはどのようなことなのか、それはまたどのようなに生きる営みとつながるのかを追求していくこと、そして哲学はこの追求を対話や議論を通じて行うことをわかってもらいたいと思っています。しかしこの対話や議論を通じての追求ということになじんでもらうことが難しいのです。近年、学生諸君が質問しなくなった、とは大学の先生方の嘆くところですが、年毎に、相手の発言の中にその人なりの知識、考え方、人格などの根ざすところを聴き取ったり、読みとったりして吟味し、論議することが苦手で、これまででした経験がないという学生諸君が増えていくことが、まさに年々、哲学を教えることを難しくしているところだと思っています。ただ私はその責めを学生諸君にだけ負わせようとは思いません。こうした傾向はわれわれの家庭、学校、社会、文化全体の中でつくり出されているもの



と考えるからです。

三年前、私は西ドイツのミュンヘン大学へ在外研究に出させていただき、家族と共に一年間その地で生活する機会がありました。そこで印象深く感じたことの一つは、日々のくらしの中で一人ひとりの発言が重みをもって受けとめられているということでした。幼い子供から老人にいたるまで一人ひとりの発言が尊重され真剣に受けとめられ、率直な意見や考えの表明が交わされるということが、実に気持ちよく日常生活、学校、大学等の中で貫徹しているのです。言葉が人格をもって受けとめられ、落ち着いて率直に言い合えることが気持ち良いのはあたりまえですが、大勢でなければ、大声でなければ、怒ったり、どなったりしな

ければ発言が無視されたり軽視されがちな日本の日常的環境にいた私には誠に新鮮に感じられ、あらためて子供の時から自分の意見を持ち表明するように家庭で、学校で育て上げられるドイツの文化的環境を見直したものでした。

今日、社会の情報化というなかでますます多様な記号形態をとった、脱人格的な情報にとりまかれるようになり、また大学もその中でその存在意義を模索していかなければならぬとき、一人ひとりの発言の中にその人の人格を受けとめ互いに人間としての理解を深め合っていくような対話と議論のできる学生を育て上げることが使命にするのも、今日の大学の一つの行き方でもあると思うのです。

春季講演会のお知らせ

都留文科大学国文学科および国語国文学会では、恒例の春季講演会を開催いたします。

日時 6月9日(土)

午後1時30分

場所 都留文科大学新研究講義棟4階 大講義室

講師 国文学者 伊藤 博先生

演題 「万葉のこころ」

地に在るがままに」

入場料 無料

第21回子供まつり 開催される

去る五月二十日(日)都留文科大学において、毎年恒例の「つる子どもまつり」が開催されました。今年で第二十一回目を迎えたこの催しに、市内各地からこの日を楽しみにしていた子どもたちや父兄約二〇〇〇人が参加しました。

会場は「ぐに」と名づけられたいくつものコーナーにわかれ、子どもたちは、大学生のお兄さんお姉さんと一緒に、自分たちが選んだそれぞれの「ぐに」でおもしろい一日を過ごしました。

子どもたちに夢をあたえてくれる、「つる子どもまつり」のこれからますますの発展が期待されます。

